

菜集を読む

松岡 隆子

種袋振れば野菜の音がする

田辺 文枝

種物屋の店頭には様々な種袋が並び、それぞれに野菜の絵が美しく描かれている。胡瓜や茄子やトマト、莢豌豆、オクラ等々、手に取って品定めをすでもなく振ってみる。それぞれ微妙に違う音がする。種袋を振るといふ句や種袋の音を詠んだ句は多いが、田辺さんはそれを〈野菜の声〉と詠んでユニークだ。野菜への愛情があればこそ聞こえる野菜たちの声なのである。

初鮎や炭の香残る夜の髪

三宅まどか

鮎の季節になると釣ったばかりの鮎を宅急便で送ってくださる方があった。川魚は食わず嫌いで敬遠していたが、塩焼きにして食べたその淡白で上品な味は正に香魚の味だった。釣り上げたばかりの鮎を炭火で焼くとは最高の贅沢だ。ガスで焼くのととは違ってひとときわ風味が高まる。夜風に吹かれ

る髪に炭の残り香を感じながら初鮎を食した充足感に浸っている。

卒寿とは真白き蝶になる日かな

森田 道子

なんと夢のある句だろう。卒寿の誕生日は白い蝶になる日だという断定は鮮やかだ。人生百年の時代、卒寿といえどもまだまだこれから、蝶のように自由に飛び回りたいとは誰しも望むところである。森田さんは「みどり句会」で小川美知子さん達と一緒に勉強されている。もともと俳句の素養のある方だと思うが、「みどり句会」の欠席投句と菜誌上の学びの下に着々と実力をつけていられているのは嬉しいことだ。

路上にミュージシャン並木には若葉

西島 美晴

路上でギターの弾き語りをしたりキーボードを叩いてジャズを演奏するなど、路上ライブには若いミュージシャンたちの情熱が弾ける。歌を通じて知らぬもの同士が一体感を持つるのも路上ライブの魅力である。若者たちの夢に街路樹の若葉が目映い。独特な破調が内容に適っている。

桐の花これがこれかと見入るなり

加々美敦子

初めて桐の花を見たのは「はまゆふ」の一泊吟行で山中湖に行った時だった。ペンションの裏手の小高い木に小さな白い花が咲いているのを見つけた。ペンションにあった植物図鑑で調べてみて桐の花だと知った。夕風に吹かれては散るその風情にしばらく見入ったものだ。

掲句は初めて桐の花を見た時の感動が率直に詠まれている。これが桐の花！と食い入るように見つめる加々美さんの姿が目につかぶ。小梨の花とも姫海棠とも言われる桐の花は詩情をそえられる花とおもう。

涼しさの牧野博士のすゑ子笹

森崎惠美子

すゑ子笹のある牧野記念庭園は西武池袋線の大泉学園駅から徒歩5分の所にあり、昔はよく仲間と吟行にいったものだ。こぢんまりとした庭園には多種多様の植物があり、記念館には博士の遺品や関係資料が展示されている。庭の一面には、博士が寿衛子夫人に因んで命名したスエコザサが青々と生い茂っている。「日本の植物学の父」と呼ばれた牧野博士を生涯支え続けた寿衛子夫人の猷身は涼やかで美しい。森崎さんはそれを〈涼しさのすゑ子笹〉と称え、見事な一句を成した。

あの世でもまた句を共にカーネーション 河上 秀子

自分より先に逝ってしまった句友への追慕の念が素直に詠まれている。「また一緒に句会をしようね。机を並べて待っていてね」などと呼びかけながら墓前にカーネーションを手向ける。カーネーションの優しさは友愛のやさしさである。

春満月「宇宙観光ガイド」買ふ

住吉 節子

近年の宇宙開発の進歩は目覚ましくいつの間にか宇宙旅行が現実化してきた。日本でもすでに2019年に一人、20

21年に二人の民間人が宇宙旅行に行っている。誰でも簡単に行けるわけではないが夢を見るのは自由だ。書店で「宇宙観光ガイド」を手にした住吉さん、早速買って帰り今わくわくしながら頁を繰っている。ISS（国際宇宙ステーション）に泊まるとは、月や火星を訪ねるには、などと興味は尽きない。折しも春満月の夜、宇宙を旅する夢は限りなく膨らむ。

その他の印象句

目の前の新樹のやうな若者と
庭隅の白山吹は待つ心
羽衣の松を遠見に波涼し
初夏の木洩れ日しかと踏みゆける
月見草月より影を貫ひけり
木洩れ日が木洩れ日をよぶ柿若葉
打水の刹那に乾く音のして
エレベーター下りきしよりの薄暑かな
眠れば薔薇のくれなゐ今日をはる
誰かと思ふ旧友のサングラス
言ひ訳は虚しきものよ花カンナ
釜飯の次々噴いて山若葉
勝手口より裏山の若葉風
独り居の淋しくなれば薔薇を見て
あたらしき名刺調ふ窓若葉
蚊を打つて反射神経大丈夫
手を洗ふ列に加はる薄暑かな

宮当 信行
矢作 裕子
梅澤 惇子
見上 恵
中原 栄
阿久津早智子
今西 知己
眞保 勝江
高野 達子
森口 誠
山下なつ子
小泉 恵子
由良野斗喜美
宮内 一昭
伊藤 生子
浅尾 泰昭
堀 すみ江